シリーズ連載　第１回

（仮称）予科練平和記念館だより

平和への祈りをこめて

予科練の碑（武器学校内）

町では現在、陸上自衛隊武器学校の東側約4・2ヘクタールを「（仮称）霞ヶ浦平和記念公園」として整備しています。この敷地内には、平成21年度開館を目標に『（仮称）予科練平和記念館』の建設を計画しています。4・2ヘクタールの用地買収は既に終了し、公園整備は国庫補助事業で進めており、近隣公園部分2ヘクタールは12月には完成する予定です。

『（仮称）予科練平和記念館』は、「歴史に学び、平和について考え、平和のメッセージを発信する場」です。陸上自衛隊武器学校内の「雄翔館」とも連携し、予科練平和記念館と行き来できるような形で、一体的に運営することも考えています。

今月号から、『（仮称）予科練平和記念館』に展示するため収集した資料の紹介を中心に、進ちょく状況等を紹介していきます。これから定期的に『（仮称）予科練平和記念館』について連載していく予定です。

第１回目は、予科練の歴史について紹介します。

町にあった二つの海軍航空隊

太平洋戦争当時、阿見町には海軍の基地が二つありました。

ひとつは現在の茨城大学農学部一帯にあった「**霞ヶ浦海軍航空隊**」です。大正10（1921）年に飛行場が開設され、翌年航空隊が置かれました。今から77年前の昭和4（1929）年8月19日には、ドイツの巨大飛行船ツェッペリン伯号が世界一周中にアジアで唯一着船したことでも知られています。

阿見原に着船したツェッペリン伯号

また、霞ヶ浦湖畔（現在の陸上自衛隊武器学校一帯）には霞ヶ浦海軍航空隊の水上班（水上機※の訓練所）があり、後に独立して「**土浦海軍航空隊**」となり、終戦まで海軍飛行予科練習生（通称：予科練生）の基礎教育が行われました。

予科練の歴史

「若い血潮の予科練の…」と『若鷲の歌』に歌われた予科練は、第一次世界大戦後、日本の海軍が航空機が主戦力と考え、優秀な若者に早くから操縦技術を習得させ、熟練した搭乗員を多く育てようとし、少年航空兵の養成機関として誕生しました。

現在の中学から高校生の年代にあたる若者が、厳しい試験をくぐり抜けて全国から集まってきました。彼らは二年半（甲種は一年半）勉学に励み、心身ともにたくましく鍛えられた後、練習生として操縦要員・偵察要員・射撃要員などの進路別に各地の部隊で訓練を受けました。飛行訓練には赤トンボの愛称で呼ばれた二枚羽根の飛行機が使われ、これに乗る練習生の姿は制服姿とともに当時の少年たちのあこがれでもありました。

予科練生の教育は、昭和5（1930）年、神奈川県横須賀市追浜にあった横須賀海軍航空隊においてスタートしましたが、隣接する基地の騒音問題や予科練生が増加したことなどを背景に、昭和14（1939）年、霞ヶ浦湖畔にあった霞ヶ浦海軍航空隊の水上班の敷地を拡張して移転してきました。

翌年には「**土浦海軍航空隊**」として独立し、終戦までの約6年間で数万人の予科練生を受け入れました。

予科練の入隊者は全国で約24万人、うち卒業生は約2万4千人でしたが、そのおよそ8割が戦争で亡くなっています。戦局が厳しくなる中で、予科練卒業生の多くが日本を守るために特攻兵として若い命を投じていったのです。

終戦時には予科練教育の場は全国24か所に広がりましたが、その中心は施設の整った土浦海軍航空隊でした。そのため、今でも阿見町は『予科練揺籃（らん）の地』と言われています。

★

※水上機：機体下部にフロートを備え、水上からも離発着できる飛行機

昔の資料を収集しています

『（仮称）予科練平和記念館』では、基地と向き合い発展してきた町の歴史を学び、広く後世に伝えていくとともに、平和について考える場を目指しています。

現在も資料の収集を行っておりますので、町の歴史に関する資料や体験談などお持ちの人、予科練生と阿見町の関係がわかるような写真や手紙などをお持ちの人がいらっしゃいましたら、生涯学習課までご連絡をお願いいたします。また今年度は戦争を体験された方々の記録映像を撮影する予定です。

来月は所蔵資料から予科練生の制服をご紹介します。

帽子（右写真）、七つボタンの制服（中央写真）、ジョンベラ（セーラー服）（左写真）

図書館で収集資料を展示します

■『予科練展』で収集資料を見ることができます

下記の期間、『（仮称）予科練平和記念館』に展示するため収集した関係資料の一部を展示します。この機会にぜひ図書館にご来館ください。

期間 8月2日（水）～15日（火）

場所 図書館2階ギャラリー・視聴覚室

展示 写真を主とし、当時使用された制服・用品など

問い合わせ　教育委員会生涯学習課☎888-1111（327）